

第十二章 ギリシアにおける青銅器文明の終焉

- 前 1600 年頃 後期青銅器時代 I (～前 1510/00 年頃)
- 前 1510/00 年頃 後期青銅器時代 II (～前 1390 年頃+)
- 前 1390 年頃+ 後期青銅器時代 IIIA (～前 1340/30 年頃)
- 前 1340/30 年頃 後期青銅器時代 IIIB (～前 1185/80 年頃)
- 前 1185/80 年頃 後期青銅器時代 IIIC (～前 1065 年頃)
- 前 1065 年頃 サブ・ミケーネ (～前 1015 年頃)

(出典) P. Warren/V. Hankey, *Aegean Bronze Age Chronology*, Bristol, 1989, p.169.

青銅器文明の終焉についての諸学説

- ・ 突然死説
- ・ ドーリス人犯人説
- ・ 海の民犯人説
- ・ ドーリス人犯人説
- ・ 気候変動説
- ・ 地震説
- ・ 大規模土壌流失説
- ・ 連続的文明移行説

粘土版史料から明らかになっていること

- ・ 文明の危機を直接示す証拠はない
- ・ ピュロス王国の粘土板：
 - ・ 最後の瞬間まで正常な日常業務
 - ・ 宮殿所属の女奴隷への食糧分配
 - ・ 決して不十分ではない
- ・ 畑の作付け状況：
 - ・ k. ke-ke-me-na における不耕作地
- ・ 若干の粘土板
 - ・ 異常事態は解釈のレベルの問題
- ・ Jn. 829：青銅原料の鍛冶工への分配
 - ・ 一人当たり余りにもわずかな量
 - ・ a-ta-ra-si-ja の鍛冶工も多い
- ・ o-ka 文書：海岸地帯への兵員の集中配備
 - ・ pu-re-u-ro への船 1 隻派遣
- ・ これらとて決定的ではない
- ・ Jn. 829：
 - ・ na-wi-jo を naos (神殿) でなく、naus (船) と解釈
 - ・ 問題の青銅は神殿に蓄積されてきた青銅の総量でなく、偶々入港した船から荷揚げされた青銅を示している。
- ・ o-ka 文書：

- ・ Hooker が指摘しているように日常の訓練を示しているに過ぎないという
- ・ 解釈も可
- ・ 外部からの危機を証明するものではない

考古学資料

- ・ 文明の崩壊は明白
- ・ LHIII B2 末期：
 - ・ 前 1200 年頃の火災による宮殿や城砦の破壊
 - ・ ミケーネ、ティリンス、デンドラ、ベルバティ、ピュロス等
- ・ 問題：突然死なのか、衰弱死なのか、それとも変化なのか？

ドーリス人犯人説

- ・ 古代ギリシア人の伝承：
 - ・ トゥキュディデスの証言：トロイ戦争から 80 年後にドーリス人の移動
 - ・ ヘラクレスから 3 代後のヘラクレイダイの帰還とドーリス人、アイトリア人、アイオリス人の南下
 - ・ ピュロスのネーレイダイ（ペイシストラトス家等）のアテーナイ亡命の伝承
- ・ 古典期における方言群の分布
 - ・ 西方方言群：アイトリア方言、アイオリス方言、ドーリス方言の空間的まとまり
 - ・ 東方言群：イオニア方言、アルカディア・キプロス方言の分布の広がり
- ・ ↓
- ・ 各方言集団の移動を想定
- ・ 城砦や宮殿の破壊の跡の存在
- ・ 鉄器や火葬の出現：ドーリス人に持ち込まれる
- ・ 1960 年代まで支配的学説
- ・ 欠点：ドーリス人の文化的痕跡を確認できず
 - ・ プロト・ドーリス人と呼びうる人々は既にミケーネ世界にいた
 - ・ 方言分化はギリシア世界の中で、既に青銅器時代に始まっており、
 - ・ 変化したのはドーリス方言ではなくイオニア方言の方である

海の民犯人説

- ・ エジプト側の資料に登場
- ・ クロアチアからセルビアにかけての地に住んでいたイリュリア人の南下
- ・ ↓
- ・ エジプト国境に殺到
- ・ ミケーネ諸王国（ギリシア南部）、ヒッタイト（小アジア）、ウガリト（北シリア）、キプロス

を滅ぼす

- ・ 前 1200 年頃 第 19 王朝末期のメルネプタハ王のとき、西方のリビアから
- ・ 前 1150 年頃 第 20 王朝のラムセス 3 世のとき、シリアから南下し、ナイル河河口で撃破

- ・ 民族名の比較
- ・ シェルデン＝サルディニア人
- ・ トウルシャ＝テュルセノイ（エトルリア人）
- ・ デニエン＝ダナオイ
- ・ アカワシュ（エクワシュ）＝アカイア人
- ・ カタストローフの後の新型武器
- ・ ナウエ2型の剣
- ・ 新型の槍
- ・ 特有の冑
- ・ 小型の円盾
- ・ ヴァイオリンの弓形の留め金
- ・ 手作りの黒色磨研土器

問題点

名称の類似性についての誤解

- ・ シェルデン＝サルディニア人≠イクヌ
- ・ トウルシャ＝テュルセノイ≠ラセンナ

ドーリス人反乱説

- ・ 武器や留め金、鉄製品について
- ・ これらは既に宮殿時代後半、LHIIIB2期、前1250～1200年にミケーネ世界に出現
- ・ 鉄製武器も同じ時期にエーゲ海東部のコス島で埋納
- ・ 手作りの磨研土器
- ・ ミケーネやティリンスで製造・使用
- ・ 外部からの侵入の証拠はない
- ・ 破壊は考古学的に確証される
- ・ 古典期における方言の分布
- ・ ドーリス方言：ペロポネソス東部と南部
- ・ アルカディア方言：ペロポネソス中部
- ・ アカイア方言：ペロポネソス北部
- ・ エーリス方言：ペロポネソス西部
- ・ Hooker説
- ・ 青銅器時代の支配階級：アカイア人
- ・ 線文字Bの言葉：アカイア人の言葉
- ・ アカイア人は豪華な石室墓を建設
- ・ ドーリス人は既にいた
- ・ 被支配者層を構成
- ・ 文字を持たないために言葉は書き残されず質素な土坑墓を使用
- ・ ドーリス人の革命
- ・ アカイア人を奴隷化→ヘイロタイ制の起源
- ・ 追放→アルカディアにアルカディア方言

- ・ アカイアにアカイア方言
- ・ 暗黒時代の墓の変化
- ・ 石室墓の消滅と土坑墓の造営
- ・ 問題点
- ・ 線文字Bやアルカディア=キプロス方言
- ・ ドーリス方言に近い
- ・ イオニア方言からは遠い
- ・ LHIII B と LHIII C は文化的に連続
- ・ →種族の変化を想定させない
- ・ 暗黒時代における石室墓・石郭墓
- ・ 支配者層の存在

気候変動説

- ・ LHIII B2 期末の気候変動
- ・ 農業に打撃
- ・ 文明の衰退
- ・ ハンティントンらの多数説
- ・ 急激な温暖化と乾燥化
- ・ ハンガリー平野での洪水、カスピ海の水位上昇、アルプスや北欧での氷河の後退、
- ・ 炭素 14 の減少=太陽活動の活発化
- ・ ↓
- ・ 地球規模での温暖化→亜熱帯高気圧帯が地中海上空に張り出す
- ・ ↓
- ・ 地中海における暑く乾燥した長い夏
- ・ ポーラーフロント、ハンガリー上空に停滞
- ・ ↓
- ・ 地中海における降雨量の著しい減少
- ・ 安田喜憲説
- ・ 急激な寒冷化と湿潤化
- ・ オランダで採取された酸素 18 の変動
- ・ シリアやトルコ、ギリシアにおける花粉
- ・ ブナの花粉の増加：寒冷な気候を好む
- ・ 柳や水生植物の増加：
- ・ 湿潤な気候を好む
- ・ 長雨による傾斜地から土壌流失
- ・ 貧栄養の赤色土壌の露出
- ・ ↓
- ・ 麦作の減少、オリーブの増加
- ・ 問題点
- ・ 大規模な気候変動を示す証拠はない

- ・ ギリシアを含むエーゲ海域での酸素 18 のデータがない
- ・ 土壌流失は生じていない
- ・ ティリンスの例は土地利用の失敗

地震説

- ・ LHIIIB2 期末期にギリシアから小アジアに及ぶ極めて広範囲な地域でマグニチュード 4 以上の地震の群発
- ・ ↓
- ・ 宮殿の建物の破壊
- ・ シリアのラスシャムラのイメージ先行
- ・ Drews の批判
- ・ 地震で破壊された文明はない
- ・ Iakovides や Kilian
- ・ 宮殿の破壊は認めても、文明の崩壊は認めていない
- ・ 周藤芳幸
- ・ van Andel と Zangger の研究に依存
- ・ アルゴリス平野、特にティリンス周辺で大規模な土壌流失・平野部や沼沢地に土壌堆積
- ・ 問題点
- ・ 一地方の現象を論じているだけ

突然死説の問題点

- ・ 破壊と断絶面が強調されるばかりで、LHIIIB2 から LHIIIC にかけての文化の連続的側面と LHIIIC 期の文化の発展を説明できていない
- ・ 例
- ・ ミケーネの礼拝室など
- ・ LHIIIB2 末の破壊の直後に再建
- ・ ティリンス
- ・ LHIIIC 期に水路の付け替え
- ・ ↓
- ・ 河川の水路変更
- ・ ナウエ 2 型の剣、蝸の絵の入った壺 (マリンスタイル)、手作りの黒色磨研土器、贅沢品の消滅
- ・ LHIIIB2 期に既に現れている
- ・ ミケーネの油商人の家
- ・ LHIIIB2 期に再建されず放棄
- ・ ピュロスの宮殿
- ・ LHIIIB1 期末の破壊
- ・ LHIIIB2 期の再建
- ・ 未加工の石材の使用、壁面に木枠の未使用、泥による床面
- ・ ↓
- ・ 宮殿の資金力と技術力の低下

- ・ 全ての遺跡が破壊されたわけではない
- ・ アッティカには破壊の痕跡はない
- ・ ↓
- ・ 文明の破壊ではなく、文明の移行